



# 外国人の見た家康公

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねたか



東照大権現像(部分、久能山東照宮博物館蔵)

私の祖父であり養父である徳川家正(徳川家一七代)は明治二七年の生まれですから、まだ回りにいる御家来達は旧幕臣の方々で、大変厳しい躰を受けて育ったようです。その祖父が笑いながら話して呉れた朝鮮旅行の出来事があります。

祖父が長い外交官生活を終った昭和一六・七年頃のことと思われ、ますが、秀吉さんと言う御名前の有名な御医者様と二人で当時の朝鮮を旅行した際、予約していたホテルが頑として秀吉先生を宿泊させることを拒否し、一方祖父家正は大変な歓迎を受けたそうです。祖父は「この秀吉先生は有名なドクターで、豊臣秀吉とはなんの関係もない」とホテルと交渉をしたようですが、どうしても宿泊は許されなかつたそうです。

その話を聞いてから三十年も

経った頃でしょうか。中国の国際海運会社が初めてホストとなって国際海運の会議が上海で行われ、日本郵船の代表の一員として私も参加しました。その開会式の後、人込みをかき分けて一人の若い中国人がやって来て「ミスター徳川か?」と言って私の手を握って離しませんでしたが、やがて名刺を取り出して

「私は孫家康と申します」と自己紹介をしてくれました。彼の祖父が家康公を大変に尊敬して名付けてくれたそうで、本当の徳川家の子孫と会えて嬉しい、私は自分の名前に誇りを持っている、とその会議の期間中私の回りにいて世話をしてくれました。まだ山岡荘八氏の大著「徳川家康」が中国で大ベストセラーになる大分前のことです。

そんな中国での出来事の十年

も前のことですが、ニューヨークの最初の駐在時代に、ある米国人の老先生から懇々と、如何に家康公が偉大な政治家であったかを聞かされたこともありました。まだ日本の歴史教育が徳川時代は闇黒の時代であったと教えていた時代の事でしたから、いわば「目から鱗が落ちる」思いで御話を聞いたものでした。

その家康公の四百年祭の節目の年が、もう数年でやってきます。家康公がもつとも愛された駿府城で亡くなられたのは一六一六年(元和二年)でしたから、数えて二〇一五年、満で二〇一六年が四百年の節目にあたります。日本の社会が揺れ動いている今日、家康公の造られた平和な日本について、これからしばらく書いてみたいと思います。